

講 演

(本紀要所載文章は凡て署名者の責任にして本會の意見な代表するものに非ず)

最近支那發見の古人類に就て

理學博士 松 村 曠

最近に支那北平の郊外に在る洞窟から古人類の遺骨が發見された。これは我々専門の立場から觀ると實に近來の尊重すべき大發見であつて、人類學上の重要問題であると共に、人類進化の研究の上に大影響を與へるものである。歐羅巴で前世界人類の遺物遺蹟が發見された事例は、必ずしも珍らしい事ではなく、中には其の遺物遺蹟を留めた人類の遺骸までも出てゐて、其れ等は人類の起原を語る重要な資料とされてゐるのであるが、足一たび歐洲を出離れると、多少の遺物遺蹟の發見はあつても、古代人骨の

最近支那發見の古人類に就て (松村)

出た事實は今までになく、偶々其の新發見が報告されても、實際に調査して見ると、皆新しい時代の物で、人類の起原を語る太古のものは一つも發見されてゐないのである。尤もジャヴァからは可なり古い物が出てゐるが、あれは人類の頭骨ではなく、中間動物の物である。故に歐羅巴を除いては、世界の如何なる地點からも、まだ原始人類の遺骨は出てゐないと云つて可かつた。ところが今回其が新に隣邦支那から發見されたのである。

全體人類の發祥地が何處であるかと云ふことは、學界の大問題であるが、學者は多く之をアジアに求めようとしてゐる。米國の學者たちは殊に其の傾向の著しいもので、現にマッシュウ博士の如きも其の人であるが、新約克博物館のオスボン博士も亦中央亞細亞人類起原説を採つて、最近論文に著書に益々之を高調してゐる。博士の説に據ると、人類の進化は食物の豊富な處には行はれないで、寧ろ食物の獲得に努力を要する地方に發達してゐる。そこで此の見地に立つて考へると、最初の人類は四季共に食物の供給を絶たない熱帯・亞熱帯に發原しなかつたと共に、又、森林地帯にも其の進化を見なかつたであらう。之を現代の原始的生活者に就て云ふならば、例へばマライ森林の原始的民族は、原野に棲息する同民族に比して明らかに劣つてゐる。ところが地質學上所謂第三紀のアシアを想像するに、アシアの低地は恐らく森林地帯であつたらうから、其處の生活に適したのは、類人猿か、若くはそれに類似した樹

上生活の生物であつて、人類は必ずや高地の原野に初めて起つたであらう、と云ふのが其の根本要旨である。そこで博士は、此の標準でアジア方面を調べた結果、蒙古から中央アジアにかけては、太古に森林地帯ではなかつたと云ふ見當を附けて、太古の人類は中央アジアに起つたのではないかと考へたのである。そして、其れ等の地方から發見される古生物の化石類に其の證明を求めた。それで、オスボン博士が斯かる考へを持つてゐる爲か、新約克博物館では、アジア探検隊を組織して、アンドリュース博士の如きは、既に五六回も蒙古に赴いてゐるが、不幸にして今まで大きな成績は擧がつてゐない。數回の蒙古探検に於てアンドリュース博士は、既に數十箱の骨を北平に搬出したが、それ等は何れも古動物の骨だつたのである。

それではオスボン博士の學説を裏書する事實はアジアの何處にも全然無いのかと云ふと、近年までは確に無かつた。一八八四年にロシアの學者其の他で、エニセイ川の上流及びオビの上流を探検した時は、前世界即ち地質學上に所謂の洪積世人類の遺した石器を少しばかり發見した。これは日本などで出土する新石器時代の物ではなく、明らかに舊石器であつたが、人類の遺骸は勿論、アジアに古く人類が居た事を確證するに足る材料は手に入らなかつた。然るに近年に成つて、アジアにも曾て古い時代に人類が生存してゐた事を證する確實な材料が初めて上つて來た。それは一九二五年にアメリカの蒙古探検

隊に加はつて行つた考古學者のネルソン氏が、ゴビで採集した石器である。ネルソン氏は其の歸途を我が日本に取つて、東京にも立寄つたので、私も會見して其の實物を見せて貰つたが、採集物中には石器の外に土器も交つてゐた。土器の出る時代には、到底人類の起原を想像し得ないが、ネルソン氏が或る場所から得た石器の中には、之を歐洲舊石器の時代別に當てると、正にムステリアン期 (Mousterian) オーリナシアン期 (Aurignacian) に該當するものがあつた。歐羅巴では、石器時代を、新石器時代と舊石器時代とに大別して舊石器時代を、更に左の七期に區分する。

- (一) シェリヤン期 (Chellean)
- (二) アシュエリヤン期 (Acheulean)
- (三) ムステリヤン期 (Mousterian)
- (四) オーリナシアン期 (Aurignacian)
- (五) ソリユトレヤン期 (Solutrean)
- (六) マグダレニヤン期 (Magdalenian)
- (七) アジリヤン期 (Azilian)

其の後は、新石器時代で、次は銅器時代、青銅器時代、鐵器時代と云ふ風に進むのである。是等は皆佛蘭西で附けた名稱であつて、各時代のチビカルタイプに當る物を發見した地の名を取つて命じたのである。又、別に其の時代に棲息した代表的な生物の名を取つて、Hippopotamus age, Mammoth age,

Reindeer age と云ふ風に算へることもあるが、要するに是等を標準として、他の何れの地方から出た遺物にも、略ぼ同時代と認められる物に各其の名を當てるのである。

そこで、ネルソンの採集中には、右の時代別から観て、確にムステリアン時代、オーリナシアン時代と鑑定すべき舊石器が見られたのであるが、別にネルソン一個の考へとしては、多くの採集石器中、小形の物には、エオリシック時代を思はせる古い石器があつたと云ふ事である。若し果してそんな物がゴビから出たとしたら、それこそオスボンの説を明證する好材料であるが、此の期の石器は、歐羅巴でも自然石か人工品かに就て議論があるのだから、遽にネルソンには従へないのである。それで、ネルソン等の探検隊が擧げ得た最も確實な業績は、ゴビで舊石器時代の遺物を得た事に止まつてゐると云はねばならぬ。

次に之と相並んでの近年の大発見は、パリの博物館から派遣されて來たシャルタン(僧侶)が、今天津に居るリサン博士と協力して、オルトス——これは黄河が非常なカーブを畫いて流れる處であるが、支那では之を鄂爾多斯と書く。其の地方の三ヶ所ばかりで舊石器時代の遺蹟を發見した。此の發見が行はれたのは一九二一年で、ネルソンの發見に先だつ四年の事であるが、其の遺蹟からは多量の石器及び骨片が出たばかりか、之と共にカモシカ其他の獸類の化石を伴出した。これは其の遺蹟の時代を定める

上に於て最好の確な材料であつて、之に比べるとネルソン發見の遺物には化石が伴はないから、石器の打抜き方及び形状の上から想像的に時代を稱へる外はないのである。リサン發見の舊石器は、其の伴出の化石動物から見て、ムステリアン期、オーリナシアン期の物であらうと考へられてゐるが、確に是はネルソンの成績に比べて數等の價值あるもので、實に十年苦心の賜である。リサンは此の發見について、「黃河流域の十年」と云ふ本を出してゐるが、それを見ても、長い間の一通りならぬ苦心が察せられるのである。

二

以上二つの發見に依つて、我々はアジアにも太古に人類が居たと云ふ事を或る程度まで確め得たのであるが、歐羅巴と亞細亞とは東西に相離れてゐて、假令其の文化は相似してゐるとしても、其れを使用した人類は、現代の人類種別が旁證する如く、同じ形體を具へてゐたらうとは思はれない。そこで古代アジアに於て人類の居た場所は略ぼ分つたとしても、それを遺した人類はどんな形體をしてゐたかを更に知りたく成つて來る。これは人類自然の追究的な欲求である。

ところが幸に、これも近年になつて、東アジアの二箇所で、確に其所に古代人類が居た事を證する事實がわかつた。其の一つは、前述のリサンが黃河の一支流から發見した化石動物の骨を、リサン自ら調

べてみると、其の中から人類の歯牙らしい物が一本現れたので、其れを北京協和醫學校の解剖學教授ブラック (Black) 博士に送つて研究を依頼した處が、博士は之を、從來支那で出た比較的古い時代の人類の歯牙並に現代支那人の歯牙及び類人猿チンパンジーの歯牙と比較研究した結果、七八歳の小兒の上顎門歯であると認めて、之にオルトス齒の名を與へた。それが如何に古い時代のものであるかと云ふ事は、伴出の化石動物が十分に證明するが、なほ歯牙其の物として古さを證明する爲に、ブラック博士は其の比重、他の獸類化石の歯牙に見る色合、筋目の状態等をも比較研究して、其の結果を發表した。これは唯一個の小さな歯牙に過ぎないが、古人類の存在を物語る上に於て、我々の眼には、無數の石器よりも貴重な材料として映ずるものである。

右の發見を外にして、今一つの貴重な發見は、即ち茲に私が「最近支那發見の古人類に就て」といふ題下に述べようとしてゐる事實である。それは北平から西南に約三七マイル程隔つた鐵道支線の一驛房山縣の附近に周口店と云ふ土地がある。此の地は石灰岩の石切場として又炭礦の所在地として有名な處であるが、其處の大石灰洞から新に古人類の骨を發見したのである。此の洞窟を最初に發見したのは、北平にゐた鑛山顧問の瑞典人アンダーソンであつたが、此の人が既に一九二一年に此のケーズで非常に多くの哺乳類の化石を發見した。そこで引續いて瑞典からツタンスキ (Zdansky) と云ふ専門の博士が

來て、アンダーソンの堀つた遺蹟を更に綿密に發掘して、掘出した骨は瑞典に持歸り、自國の大學で研究した、其の結果人類の遺骸と云ふより外はない二個の齒牙を發見した。此の事は一九二六年即ち我が大正十五年に、瑞典の皇太子が來朝された時、北平へも立寄られた機會に、學會總會の席で、アンダーソンから報告せられたが、其の齒は奥齒であつた。さうした發表があつたので、之に刺戟せられた北平の中央地質調査所では、例のブラック博士のゐる協和醫學校解剖部と協同して、周口店の洞窟の系統的發掘に着手したのが、一九二七年の事で、爾來長い間努力したが、容易に記録的な成績を擧げることが出来なかつた。それで遺憾ながら最早發掘を打切る外はないと覺悟した十月の幾日かに成つて、曩に瑞典のツタンスキ博士が人類の遺骸としか名づけ方がないと云つた白齒を發見したのと同一の地點から、又一本の齒牙が出て來た。それで喜び勇んだブラック博士は綿密且つ入念の研究を其齒牙に就て重ねた結果、それはツタンスキ發見の齒牙と同種且つ同地質年代の物であることを確めて、其の事を論文に書いて發表した。其論文に據ると、博士の研究は實に精緻を極めたもので、僅に一本の齒牙を四面から細かく研究し、或は之を現代支那人、類人猿チンパンジの齒牙とも比較し、又、齒冠までも調べてゐる。博士は斯くて後、之に *Sinanthropus* と云ふ學名を命じた。正しくは *Sinanthropus pekinensis* で、つまり北京支那人を意味する。私が其の論文を入手したのは一九二八年の二月頃であつたが、寫眞

に就て見ても、又、記事の上から観ても、これは確に *Homo* であると面白く感じて、直ちに東洋學藝雜誌に發表した。其の年恰度私は支那へ行つたので博士を訪問したが、生憎博士は其の齒牙を携へて歐羅巴行脚に出かけた跡であつた。それで齒を見ることは諦めて遺蹟を審査に行かうと思つたが、これも折悪しく、其の年の秋は其の附近へ土匪が出没して危険だつたので、引き止められた。其の年（一九二八）に又、北平中央地質調査所と協和醫學校とは周口店に協同發掘を行つたが、今度は小兒の下顎骨、顛頂骨の一部分、齒牙の一部分が出て來た。博士はそれも亦直ぐ論文にして發表したが、其の發表に據ると、これ亦前年發見の *Sinanthropus* と同種屬で、頭の隆起が缺如してゐる事、及び齒牙の形質から觀て、原始的狀態を帯びた物らしく考へられるのである。それでブラック博士は其の新發見をジャヅァで開催の太平洋學術會議に公表するつもりで、一切の遺骸のカストを携へて其の地に赴いたが、自分も神戸から同船したので、恰度其の二三日前に出來たといふ抜刷を見せられた。此の發表は勿論會議の席上で大喝采を博した。前年の發見が、歐羅巴では餘り反響が無かつたのと比べて、面白い對照であつた。此の發見は、一九二八年も暮に迫つての事であつたが、それ以來、周口店は益々注目すべきものとなつた。歐羅巴では僅に一本の齒牙が發見されたと云ふやうな例は、必ずしも珍しくないが、周口店の洞窟は面積も廣く、諸動物の化石骨も無數に存在するのであるから、將來何を出すか見ものであると云ふ感

じを以て我々は注視してゐた。すると一九二九年も押詰まつた十二月二日になつて、其の洞窟の調査に主として任じてゐた支那の青年地質學者斐文中に依つて、窟内の一部分から *Sinanthropus pekinensis* の腦蓋骨が発見された。それで直ちに之を北平に持ち歸つてブラック博士に見せた結果、博士は爾來熱心に其の附著灰華の剝離に努力を重ね、傍ら一部づゝの研究成果を發表してゐる。此の腦頭蓋の發見は甚だ大袈裟に取沙汰されて、十個の完全なる古人骨が出たなどと云はれたが、全然誤報であつて、ブラックは其の後に訂正文を公表してゐる。ブラックは學者的な愉快な性格の人物であるが、得るに隨つて續々中間報告を出してゐる處は實に立派な態度で、之を自己一個の研究資料として匿秘せず、一般學界の共同研究に訴へてゐる奥ゆかしさは敬慕に値する。一九三〇年の春に入手した報告にも、或る程度まで剝離作業の行はれた該腦頭蓋を、側面、前面、後部面から撮影した寫眞數葉とブラック自身の意見とが出てゐるのを見たが、ブラック博士は、此の腦頭蓋を以て妙齡婦人の物とし、時代の點では歐羅巴に見られる *Pre-Neanderthaloid type* に屬するであらうとの意見を發表してゐる。其の後に又、博士は、漸く内面部を除く灰華剝離作業が竣つたといふので、最近又、之を各方面から撮影した數葉の寫眞を、或る部分の計測數字と共に、諸國の學者に送り、自分の考が漸く確められて來たことを報告した。其れ等の寫眞は何れも實物大で、これだけの材料があれば、或る程度までの議論は立てられるから、狭量な學者な

らば決して斯かる發表はしないのであるが、發見後三十餘年、十分糟粕化した後に寫眞を發表する類の人々とは撰を異にして、剝離作業の一進捗毎に、續々とフランクに發表して行く博士の態度は、返す返すも見上げたものである。

ブラック博士の外に、支那の青年古生物學者(獨逸仕込の人)楊鍾健も論文を書いてゐるが、此の人は同じ遺蹟から出た無數の化石動物の骨の研究である。楊氏の記述に據ると、全體の化石骨の量は千五百函に上ると云ふから、如何に發掘が盛に行はれたか推測せられるのであるが、而もそれに拘らず、ブラック博士に據ると此の古人類の使用した一片の石器も發見されてゐないのみか、火を使つた痕跡すらも上がつてゐないと云ふ事である。これは非常に意味深長であつて、同じくブラックの考に據ると、此の古人類は、石器類を使用せず、火を用ゐる方法をも知らなかつた生物であることを意味するからである。若し斯かる生物であるとすれば、甚だ古い時代が考へられるが、其の當否は、此の洞窟が住居に用ゐられたものか否かに因つて決せられる。ところが此の腦頭蓋は別に六人分の齒牙其他を伴出してゐるから、恐らく家族的生活を營んでゐたものだらうと考へられてゐる。果して然らば此洞窟は住居であつた事に成るが、此の考へ通りとすれば、或は將來石器が出て來るかも知らない。

三

第一回發見の頭骨に就いては、今までの處それだけの事しか公けにされてゐないが、最近に又、第二の頭骨を得たと云ふので、ブラック博士から實大寫眞を送つて來た。これには簡単なタイプライターの説明書が添附されてゐるだけで詳細は分らないが、此の發掘は七月二十八日で、八月に其の報告を受けた。此の第二回發見の頭骨は、遺蹟發掘中に氣が注いだのではなく、無數に出た骨を研究室へ持つて還つて見ると、其の中に人骨があつたので、それを組立てたのである。地層から云ふと、これは第壹回發見の時よりも少し上層である。Sinantropus も種々の地點から出るので、一九二八年の發掘の時に、既に Locus A 及 Locus B の符號を附してゐるが、此の第二回發見の頭骨は Locus D からの材料の中よりして複舊させたものである。タイプライターの説明書に據ると、これは壯年男子の物らしいとの事で、頭蓋の最大幅徑は略ぼ同様であるが、長さは新頭蓋に於て二糎程大きく、其の他、前頭部の隆起が低く、骨の平均厚度も比較的少い。これは恐らく男女の性別に因る差異であらうと考へられる。此の第一、第二の頭蓋が果して同時代のものかどうかは伴出化石動物骨がない爲にまだ判明しないが、兎に角近年に無い大發見で、これが洪積期の初め頃の物であらうと云ふことだけは云へる。最初一九二一年にアンダーソンが發見した時には、伴出の動物化石骨が第三期の終の物であると傳へられたので、一時は第三期の人類骨と考へられ、世界未曾有の發見として喧傳せられたが、其の後の研究で、洪積期の初めの物と改訂

された。今回発見された頭蓋骨に對する諸學者の委しい意見は、未だ確定してゐないが、佛蘭西の M. Boule は、之を曾てシッヅから出た Pithecanthropus の第二例であるとし、又、英國の解剖學者 Sir Arthur Keith は歐羅巴のネアンデルタールの先祖であるとし、ロンドン大學の解剖學者たる Elliot Smith は Pithecanthropus とエオアントロプスとの間を結び附ける物であると、何れも簡單に評してゐる。

四

今までにネアンデルタールとかエオアントロプスとか云ふことを述べたが、これは一八五六年にプロシヤの Düsseldorf と Elberfeld との間を流れるネアンデルタール (Neanderthal) 露谷の石灰洞窟から Fuhlrott 氏が発見した頭蓋を標型として、同じ部屬であると思料せられる古人骨の代表名稱としたもので、其特徴は著しく高等猿類チンパンジーに類似し、現代人に比して眉弓隆起が甚しく、頭蓋頂が著しく低い。隨て側面から見ると口蓋部が前方へ突出する。だから寫眞を一旦しても分る通り、ネアンデルタール人類を以て呼ばれる洪積世人類は、人類と猿類との中間に入るものである。次にスミスの評言の中には、エオアントロプスの事が言はれてゐるが、私は餘り引用したくない。これは一九一二年に英國のビルトダウン地層中から発見された古人骨の頭蓋の破片を、ウッドワード博士が接合補足して複製したものであるが、出來上つた形體は甚だ進み過ぎてゐるに拘らず、下顎骨は非常に劣等である。そこ

で英國の學者は大體それが人骨であることを認定したが、米國の學者は之に攻撃の鋒を向けて、頭蓋部は人類であるが下顎骨は猿類の物であるとし、稍遅れて其の翌年即ち一九一三年に同じ場所から發見された犬齒の如きは、明らかにチンパンジの物であるとして、議論の種となつた。

今一つ、別に、ジャヴァのピテカントロプスの事を云つたが、これは一八九〇年から翌一八九一、九二一年にかけて、アムステルダムの古生物學者オイケン・デュボアが、ジャヴァのベンガワン川(一名ソロ川)沿岸から發見したもので、採集品は、頭蓋骨の破片と左上顎第二白齒、右上顎第三白齒、左大腿骨が主たるものであるが、大腿骨が人類的であるのに對して、頭蓋は猿的である。ピテカントロプス・エレクトウスと云ふ名も「直立したる猿」の意味で命ぜられたのである。是等の遺骸に關する論文が發表された時は、世界の學界は一大センセーションを受けて、或人は猿類説を主張し、他の人は人類であるとし、更に他の人は又中間動物であると云つたが、其の各骨が發見された場所、及び發見の時に差がある爲に中には疑ひを挟む人すらあつたのである。しかし、大體に於て中間動物と觀るのが穩當であらう。

是等既知の古人骨又は古人骨らしいものと、今回發見されたシナントロプスとを、各寫眞を基礎にして圖に描いた上、其の輪廓線を比較して見ると、大體に於てピテカントロプスに類似してゐるやうであるが、仔細に見ると多少の出入があつて、線がピッタリとは合はない。今日の進歩したる人類では、十

人が十人とも斯かる線の合致を見ないが、それは複雑婚の結果であつて、太古の人類にあつては雑婚の事實がないから、著しい變化が無く、随つて線は合致するのが定則である。例へばネアンデルタール人類の遺骸の如きは、皆一線に乗るのである。然るにピテカントロプスとシナントロプスとを比べて見て、線が合はない所から考へると、これは別物と観た方が可からう。それに又、ピテカントロプスは中間動物らしいが、シナントロプスは、猿類と人類との中間の物ではなくて、人類である。故に、これはブラック博士の意見の如く、ブレネアンデルタール型であつて、ピテカントロプスとは全然系統を異にし、ネアンデルタールの祖先であると思ふ。

最近の報道に依ると、ロンドン大學のエリオットスミス博士が、シナントロプスの腦髓を調べるため、愈々支那へ來ると云ふ事であるから、其の研究成績が發表され、又、ブラック博士の総合的な研究が公表された時こそは如何に學界を賑はす事であらうと期待される次第である。(昭・五・九・二五講演大意筆記)

社 頭 雪

小笠原長生

玉垣も鳥居もやれも埋もれて

神さびませる雪のみやしる

稀世の大天皇

藤井甚太郎

明治天皇聖徳の宏大には當地に參り、初めて今更の様に被存候……途中
Oyama 島にて例の佛牙寺に天皇の御尊影の安置せられ居るを實見致候が、
是は明治三十七八年戰役後……某の奉納仕り候もの由に候……これ等
を併せ考へ候へば、明治天皇は稀世の大天皇にてましませしことと存候。
又今日は偶然、舊幕府より英國に留學を命ぜられし菊地大蓋先生以下の
London 大學に於ける成績表各學科につき Good, very good と採點し、
席順等詳記し教授の署名せるもの明治元年（一八六八）四五月頃の分三十
餘枚發見……かゝるもの澤山有之、愉快至極に候。（ロンドン來信の一節）